

合理的配慮の提供事例報告書【小学校】

事例の概要

B小学校は校舎の耐震化にあたって校舎を新築した際に特別支援学級の教室の近くにプレイルームを配置し、トランポリン、ボールプール、ハンモック等の遊具を設置した。また児童がクールダウンできるように防音され柔らかい壁のある部屋も設置した。これらは児童の実態に応じて日常的に活用されている。またエレベーターも設置され必要に応じて使用することができるようにしている。

A児は、軽度の知的障害と自閉スペクトラム症の診断を受けている。聴覚過敏の傾向があり、体育館での全校生の大きな歌声、音楽会の合唱等が苦手で、耳栓をしたりしているが、その場を離れ防音された部屋や別室で過ごすことがある。穏やかで優しい性格であるが、嫌なことを思い出したり、気になることがあると自分の額や頭をこぶしてたたくことがあり、心理的な安定を図るためにプレイルームや防音された部屋で過ごすことがある。また不安傾向が強いので行事のある期間は過負担にならないように保護者、本人と相談しながら支援方法を検討している。

1 対象児童の障害種

自閉症

知的障害

2 障害の程度

非該当(知的障害)

※学校教育法施行令22条の3に該当か非該当か

3 在籍状況

小学校・特別支援学級

4 学年

小5

5 対象児童の実態

A児は、軽度の知的障害と自閉スペクトラム症の診断を受けている。聴覚過敏の傾向があり、体育館での全校生の大きな歌声、音楽会の合唱等が苦手で、耳栓を使うこともあるが、その場を離れることが多い。また他者とペースを合わせることが苦手で国語、算数では小集団の学習を好まず個別での学習をすることが多いため教室内に個別の学習のスペースを設けている。

また穏やかで優しい性格であるが、嫌なことを思い出したり、気になることがあると自分の額や頭をこぶしてたたくことがあり、心理的な安定を図るためにプレイルームや防音された部屋で過ごすことがある。

6 対象児童についての合意形成に至るまでの経緯

(1 誰からの申し出か 2 申し出の内容 3 連携、調整した関係機関 4 合意形成に至った結論)

保護者はA児の特性をよく理解し、A児にとって負担になりすぎない学校生活を過ごせることを望んでおり、毎日の連絡帳でのやりとりや下校時の会話、懇談会等で支援方法について担任、管理職等と相談している。大きな音や声が響く場面では耳栓を使ったり、静かな場所で過ごす等の調整については職員全体や全校生も理解が進むようにしている。

A児にとって一番負担となっている運動会、持久走大会、音楽会、自然学校等の行事の前は参加のありかたについて保護者と連携して担任、校内の特別支援教育担当者によるチームで相談し、交流している学年教師や自然学校で利用する施設との連絡会も設定した。

7 基礎的環境整備の視点と概要

基礎⑤ 施設・設備の整備

B小学校は校舎の耐震化にあたって校舎を新築した際に特別支援学級の教室の近くにプレイルームを配置し、トランポリン、ボールプール、ハンモック等の遊具を設置した。

また児童がクールダウンできるように防音され柔らかい壁のある部屋も設置した。これらは児童の実態に応じて日常的に活用されている。またエレベーターも設置され必要に応じて使用することができるようにしている。

基礎⑦ 個に応じた指導や学びの場の設定等による特別な指導

特別支援学級が2学級あり、それぞれの担任や交流学級の担任、専科の担当者が連携し、必要に応じて場所を分けて学習できるようにしている。また通級指導教室も設置されるとともに、校内には学校生活支援教員が配置されており、各学級の担任と連携しながら指導方法について検討できるようになっている。

8 合理的配慮の観点と概要

合理③-2 発達、障害の状態及び特性等に応じた指導ができる施設・設備の配慮

A児は、軽度の知的障害と自閉スペクトラム症の診断を受けている。聴覚過敏の傾向があり、体育館での全校生の大きな歌声、音楽会の合唱等が苦手で、耳栓をして対応をすることやその場を離れることが多く防音されている空間で過ごすことがある。

また他者とペースを合わせることが苦手で国語、算数では小集団の学習を好まず個別での学習をすることが多いため教室内に個別の学習のスペースを設けている。また穏やかで優しい性格であるが、嫌なことを思い出したり、気になることがあると自分の額や頭をこぶしでたたくことがあり、心理的な安定を図るためにプレイルームで運動遊びをしたり、ブランコでの揺れを楽しんだりできるようにしている。

合理①-2-2 学習機会や体験の確保

こだわりや未知の体験への不安が強いので、初めての行事や苦手な行事の前には少しでも安心して臨むことが出来るように事前学習の機会を設けている。本年度の自然学校の前には特別支援学級在籍の5年生児童の4名とその保護者と共に活動する場所に行き、実際に山歩きをしたり、施設を見学したりした。家を離れて宿泊することへの不安があったようだが、実際に宿泊する部屋を見たり、テントに入って転んでみたりすることで楽しみな気持ちを持てるようになり、自然学校の間も比較的落ち着いて活動に参加することが出来た。

9 成果と課題

成果

通常の学校の特別支援学級に在籍する児童にとって各行事は時として大きな負担になることもあり、保護者がそのことを心配されるケースが多い。保護者、児童本人が少しでも心理的な負担が軽くなるような参加のありかたを検討するためにも日頃の様子を写真や映像で残し、振り返りや個別の指導計画作成に生かすことが必要である。

課題

児童の実態に応じて合理的配慮を検討する会議、打ち合わせ等の時間を勤務時間内に設定することが難しい現状にある。